

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520053

研究課題名(和文)バルトリハリ言語哲学の原像と虚像 『ヴリッティ』と『ティーカー』の比較研究

研究課題名(英文)The original and false images of Bhartrhari's philosophy of language: A comparative study of the Vrtti and the Tika

研究代表者

小川 英世(Ogawa, Hideyo)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：00169195

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：文論はバルトリハリの言語哲学を核心をなす。『ヴリッティ』に展開される文論にはバルトリハリが第1巻と第3巻において論ずる諸点が忠実に反映されている。バルトリハリの文論を『ティーカー』は、パーニニ文法学に本来的でないミーマーンサー学派の文意論の枠組みで解釈する。ヘーラーラージャとは異なり、『ティーカー』の作者プニアラージャが『ヴリッティ』を読んでいないことは確実であり、プニアラージャはパーニニ文法家ではないと断言できる。したがって『ティーカー』はヘーラーラージャの第2巻に対する注釈のプニアラージャによって作成された縮約版ではあり得ない。『ティーカー』への留保なしの依存には抑制的であるべきである。

研究成果の概要(英文)：The sentence theory constructed by Bhartrhari in the second kanda of his Vakyapadiya forms the core of his philosophy of language. In the theory as expounded in the Vrtti are reflected points Bhartrhari makes in the first and third kandas of the work. The Tika tries to expound the theory within the framework of the theories of a sentence developed by Mimamsakas, which is originally foreign to Paninian grammarians. Unlike Helaraja, who commented on the third kanda of the work, Punyaraja, the author of the Tika, undoubtedly is not versed in the Vrtti. We can confidently say that he is not a Paninian grammarian. Accordingly, it is unlikely that, as Prof. Ashok Aklujkar argues, the Tika is a compendium by Punyaraja of a commentary on the second kanda by Helaraja. In interpreting the second kanda, we should refrain from relying heavily on the Tika, so as not to superimpose false images on Bhartrhari's philosophy of language.

研究分野：インド哲学(パーニニ文法学とパーニニ文法学派の言語哲学ならびにインドにおける諸言語理論)

 キーワード：バルトリハリ ヴァーキャパディーヤ 文 文意 パーニニ文法学 パタンジャリ マハー・バーシャ  
 ミーマーンサー学派

## 1. 研究開始当初の背景

K. A. スプラマニア・アイエル教授がその生涯をかけたバルトリハリ(5世紀頃)の『ヴァーキャパディーヤ』(VP)研究は20世紀インド学が打ち立てた金字塔のひとつである。教授の『ヴァーキャパディーヤ』韻文テキストならびに注釈文献『ヴリッティ』、プニアラージャ(11世紀頃)の『ティーカー』、ヘーラーラージャ(10世紀頃)の『プラカシヤ』、第1巻「ブラフマン章」『ヴリッティ』副注ヴリシヤバ(7世紀頃)の『パッダティ』の校訂テキストの公開、『ヴァーキャパディーヤ』韻文テキストの全訳(英訳)は現在のバルトリハリ研究の基礎をなすものである。教授の注釈文献を含むテキスト出版は、ラグナータ・シャルマー教授の一連の『ヴァーキャパディーヤ』および注釈文献に対する注釈文献『アムバーカルトリ』の実現を促した。現在のバルトリハリ研究者はこれら両学匠の偉業の上に研究を展開している。

ところで、我々バルトリハリ研究者が目下直面している深刻な問題は、アイエル教授が校訂した『ヴリッティ』、とりわけ『ヴァーキャパディーヤ』第2巻「文論」に対する『ヴリッティ』のテキストが多くの問題をはらんでいることである。『ヴリッティ』読解の困難さは、比較的テキストが安定しており、副注『パッダティ』の存在によって助けられる第1巻に対する『ヴリッティ』の場合も、その独特のスタイル・分詞構文、パフブリーヒ複合語等の多用によって重層化された長い一文・の多用という点に見出すことができる。この容易なる理解を拒絶したスタイルを貫いている第2巻『ヴリッティ』は、テキストが確定できない多くの箇所を含む点でその読解は困難を極める。このために従来の第2巻研究は専ら『ティーカー』にのみ基づいてなされ、バルトリハリの文論をプニアラージャの眼を通して理解せざるを得なかった。

そこでA. アクルジュカル教授は、『ヴリッティ』再校訂テキストを作成することを公にし、批判的校訂テキスト作成のプロジェクトに着手した(ハーヴァード大学博士学位論文)。プロジェクトの一環として2003年にはアクルジュカル教授の指導の下、京都大学の赤松明彦教授の主催になる小川も参加するセミナーが毎週土曜日京都大学において開催され、第2巻『ヴリッティ』テキストの問題点が検討された。アクルジュカル教授には、『ヴリッティ』再校訂テキストの出版に躊躇があり、同セミナーには『ヴリッティ』再校訂テキスト上の問題を世界の研究者に共有してもらおう狙いがあった。そこでアクルジュカル教授は、準備中のアクルジュカル版校訂テキストを限られた研究者に公開することに決めた。小川もまたアクルジュカル版校訂テキストの提供を受けた研究者の一人であり、なおかつ小川は指導学生小林芳恵氏を通じて教授の収集した諸写本もすべて譲り受けることができた。残念ながらアクルジュカ

ル教授版校訂テキストは、現在に至るも未だ刊行されるに至っていない。

アクルジュカル教授の功績は、アイエル版『ヴリッティ』にある種の客観性を与えるという点にある。すなわち、我々『ヴリッティ』の読者は、二人のエディターの読みを比較しながら、最良の読みを採択できるという環境を得た訳である。このような『ヴリッティ』環境の中での上記京都セミナーの成果を踏まえた小川の諸研究から、『ヴリッティ』が著者自らによる真正の「自注」以外のもではあり得ないことに加え、『ティーカー』の解釈はバルトリハリの原意を逸れることが多く、彼の注釈に基づいてバルトリハリを理解することには抑制的でなければならぬことが徐々に明らかとなってきた。従来アイエル教授による『ティーカー』に基づく第2巻理解と彼の解釈に立脚したテキストの読みに従うバルトリハリの文論理解は果たしてバルトリハリの言語哲学の原像を伝えるものなのか、深刻な反省を迫ることとなった。そして、真正のバルトリハリ文論(文論の原像)の解明のためには、一旦『ティーカー』は括弧内に入れて、『ヴァーキャパディーヤ』と『ヴリッティ』との一体的読解の試みこそが、たとえ困難さが付き纏おうとも、不可欠であるとの認識に至った。このことが本研究を企図する出発点にあったものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、インド哲学諸派の体系化の最初期にあつて諸思想家に多大なる影響を与えたバルトリハリ(5世紀頃)の『ヴァーキャパディーヤ』第2巻「文論」に焦点を絞り、「自注」『ヴリッティ』との一体的理解が示すバルトリハリ言語哲学の原像と同巻に対する後代の注釈書プニアラージャ(11世紀頃)の『ティーカー』に基づく解釈が示すその虚像との差異の実相を明らかにし、バルトリハリ研究における『ヴァーキャパディーヤ』の「自注」『ヴリッティ』との一体的理解の重要性を指摘することによって、バルトリハリ研究の新たな地平を開拓することである。

『ヴァーキャパディーヤ』第2巻「文論」に関しては、赤松明彦教授による、『ティーカー』の解釈に依拠した翻訳研究がある(赤松明彦『古典インドの言語哲学2 文について』東洋文庫638 平凡社、1998)。赤松教授は『ヴリッティ』の重要性を認識しながらも、テキスト問題から『ヴリッティ』を視野に入れた翻訳作成を断念している。バルトリハリ研究は、アクルジュカル教授の『ヴリッティ』の批判的校訂テキスト作成の試みをもって確実に新時代に入ったということが出来る。今や『ヴァーキャパディーヤ』と『ヴリッティ』との一体的理解によってバルトリハリの思想を理解すべき段階にある。

この比較研究によって、バルトリハリの核心的文論の原像を明らかにし、『ティーカー』

が第2巻解釈の枠組みとして導入するミーマーンサー学派文論の議論枠、すなわち、バツタ派の主張する見解A「文有部分、文を構成する各単語によって表される各意味の相互連関が文の意味である」(アビヒタ・アンヴァヤ)とグル派の主張する見解B「文有部分、文を構成する単語が、相互に関連付けられた一個の意味を表すとき、文の意味がある」(アンヴィタ・アビダーナ)は、パーニニ文法学本来のものではないこと、すなわち、『ティーカー』はパーニニ文法学にとって外的な枠組みにおいてバルトリハリ文論の虚像を提示していること、よって、バルトリハリ文論は『ヴァーキャパディーヤ』と『ヴリッティ』との一体的読解によってのみ理解されるべきことを明らかにする。

このようにバルトリハリの言語理論を彼自身の注釈に基づいて理解し、確定することは体系化以前の揺籃期(5世紀インド)のインド哲学諸思想のありようの確定に通じ、特に仏教認識論研究、ミーマーンサー学派研究に影響するところ大である。さらに『ティーカー』の学説誌的理解の批判的扱いは5世紀以降のインドの文論のバルトリハリを軸とした展開を学派横断的に解明することに資するものである。

### 3. 研究の方法

『ヴァーキャパディーヤ』はパーニニ文法学における(1)2種の意味 - 概念的に抽象された意味と概念化以前の全一なる意味、(2)二種の言語単位 - 文法学が説明対象とする言語単位と説明のための言語単位、(3)言語単位とその対象の間の二種の関係 - 表示・被表示能力と因果関係、(4)言語使用の二種の結果 - 正語の場合の功德と不正語の場合の意味理解という「八主題」を論ずる。文は文法学によって説明されるべき言語単位であり、文法学派が言語的コミュニケーションの唯一の手段とする実在する言語単位であり、他のインド哲学諸派が認識手段(プラマナ)として認める「シャブダ」(言葉、聖言量)に相当するものである。「文」(ヴァーキャ)とは何か、文の意味(文意、ヴァーキャ・アルタ)とは何かという問題こそはインドにおいて言語理論の核心をなす問題である。まさにこのゆえにバルトリハリは『ヴァーキャパディーヤ』第2巻を設けてこれらの問題を主題的に論じなければならなかった。同巻は490詩節から構成される。そこで本研究は、「文」の8定義を列挙する第2巻冒頭2詩節に対する『ティーカー』に注目する。『ティーカー』によれば、文の8定義とそれぞれに措定される文の意味が議論される中心的な詩節は以下のとおりである。

- (1) 動詞(VP 2.314-327)-行為(VP 2.418)
- (2) 語の集合体(VP 2.3-6; 41-48)-サンサルガ(結合)(VP2.42、46)
- (3) 語の集合体に存在する普遍(外的スポータ)(VP 2.7-14)-直観(VP 2.143)

- (4) 単一で部分をもたない語(外的スポータ)(VP 2.19-27)-直観(プラティバー)(VP 2.143)
- (5) 順序(VP2.49-53)-サンサルガ(結合)(VP2.42)
- (6) 知識による単一化(内的スポータ)(VP2.30-33)-直観(VP 2.143)
- (7) 最初の単語(VP 2.47)-サンスリシュタ(結合体)(VP 2.18)
- (8) 期待を有する単語のすべて(VP 2.48)-サンスリシュタ(VP 2.18、415)

本研究は『ティーカー』の第2巻内容分析を暫定的に妥当なものとして受け入れた上で、ここに挙げた詩節を中心に『ヴリッティ』と『ティーカー』の比較研究を行う。VP 2.1-12、34-35、52-57、77-151 に対する『ヴリッティ』は欠落している点が問題となるが、この点は現存第2巻『ヴリッティ』および第1巻『ヴリッティ』にパラレルを求める。それぞれの『ヴリッティ』はバルトリハリの言語哲学、文法哲学を余す所なく表白しており、『ヴァーキャパディーヤ』全体、第1巻『ヴリッティ』との相互参照によって初めて真意に至り得るものである。

『ヴリッティ』は、極めて難解であり、すでに指摘したようにそこにおける一文を英語あるいは日本語の一文で表現することは絶望的なまでに不可能である。一つの詩節に対する『ヴリッティ』のテキストの確定は、その内容の理解と相即であり、内容の理解は『ヴァーキャパディーヤ』全体、『ヴリッティ』全体の理解と相即である(この点にアクルジュカル教授が『ヴリッティ』再校訂テキストの刊行に踏み切れない理由があると推測できる)。

バルトリハリ言語哲学の原像を確定しなければ、『ティーカー』の提示するバルトリハリ言語哲学の諸相が虚像を含むものであることも確定し得ないことは自明である。バルトリハリ言語哲学の源泉は、パーニニ文法学の大成者パタンジャリ(前2世紀頃)が『マハー・バーシャ』に展開する言語哲学的議論である。したがって、本研究は、『マハー・バーシャ』に展開される言語哲学的議論の詳細な解明のために、研究協力者イ・ジェヒョン(バルトリハリ時間論、広島大学大学院)、川村悠人(『パッティ・カーヴィア』によるパーニニ文法学研究、広島大学大学院、2015年度より日本学術振興会特別研究員・京都大学)、石村克(ミーマーンサー学派真理論、広島大学大学院、2015年度よりニューメキシコ大学)、友成有紀(ニヤヤ学派、ミーマーンサー学派パーニニ文法学批判、東京大学大学院、2013年度より日本学術振興会特別研究員・広島大学)、尾園絢一(ヴェーダ学、東北大学助教、2015年度より東北大学研究員)の各氏との、我が国初となる『マハー・バーシャ』研究会を各年度定期的に開催した。

#### 4. 研究成果

『ヴリッティ』と『ティーカー』の偏差を示す象徴的な例として VP 2.44-46 を挙げる。

『ティーカー』は、同3詩節を、バルトリハリが、文意として理論的に構想される8種のもののうち、ミーマーンサー学派バッタ派の見解Aの枠組みにおいて措定される〈語意間の結合〉(サンサルガ)説を論ずるものとする。当該3詩節は、『ティーカー』の解釈に基づく赤松教授訳をもって提示すれば次のとおりである。

- (1) VP 2.44 「しかし、他の者たちは、次のように考える。[ 単独で単語がそれ自身の意味として表示する ] 一般的な意味(サーマーンヤ)は、[ 文中で表示される ] すべての個別的な意味(ベダ)に対する適合性をもっている。それは、他のもの(単語)との[ 文中での ] 結びつき(サンサルガ)に基づいて、個別的な意味のかたちをとることを分有するのである」
- (2) VP 2.45 「[ 文中でのその意味を完全なものとするために ] 個別的な意味(ベダ)を必要としているそれ(一般的な意味)には、浮遊性がある。[ 文中における ] 結びつきは、この浮遊性を、個別的な意味のうちへと入り込ませつつ限定するのである、と」
- (3) VP 2.46 「結びつきは、結果から[ その存在が ] 推理されるだけのものである。それは[ それ自身の ] いかなるかたちをもっていない。それゆえ、[ ここの単語が表示する意味とは別のものとして、] それ(結びつき)が存在することは絶対はないと、[ ある者たちは ] 主張する」(赤松明彦『古典インドの言語哲学2 文について』東洋文庫 638 平凡社、1998、24頁)

本研究は以下の点を明らかにした。

(1) これらの詩節において、バルトリハリは、カーティアヤナ(前3世紀頃)がA 1.2.45に対する第5ヴァールティカにおいて提示する、文中の各語の意味の間の関係としての文意を論じている。

(2) 『ティーカー』は、VP 2.44 を、見解Aに基づいて文意は文中の個々の語の意味に過ぎないという見解を提示したものと解釈する。しかしこの見解は、文中の個々の語の意味とは異なる文意は文から理解されないとするA 1.2.45 に対するカーティアヤナの第5ヴァールティカによって否定される見解である。このことは、プニアラージャが『マハー・パーシャ』の議論を知らないことを示唆する。

(3) VP 2.44 の「一般的な意味」(赤松)を、『ヴリッティ』がすべての個別化を受け入れ得る能力を本質とする、差別化に対する適合性一般とするのに対して、『ティーカー』は、赤松教授の訳のとおり〈一般的な意味〉とし、それがいかなるものなのかに踏み込まない。『ヴリッティ』の「差別化に対する適合

性一般」とは、例えば「デーヴァダッタが料理している」に関して言えば、「デーヴァダッタが」が単独で使用された場合のデーヴァダッタがいかなる〈行為〉に対しても〈行為主体〉として機能し得る能力を有することを指す。

(4) VP 2.46 の「関係」(赤松「結び付き」)を、『ヴリッティ』が文中の定動詞形(V、料理している)が表示する〈行為〉(料理行為)と名詞形(N、「デーヴァダッタ」)が表示する〈カラカ〉(例文の場合〈行為主体〉)間の関係とするのに対して、『ティーカー』は、VとNの意味とは異なる、そのVとNの意味の間に成立する限定関係とする。パタンジャリによれば、この限定関係は、〈行為〉と〈カラカ〉の関係に条件付けられるものである。

(5) VP 2.46 の「結果」を、『ヴリッティ』がすべての個別化を受け入れ得る能力を本質とする差別化適合性一般に対するその限定(「料理する」が使用されることによって、デーヴァダッタの〈行為〉に対して〈行為主体〉として機能し得る能力は料理行為に制限される)とするのに対して、『ティーカー』は、文を構成する各語の一般的な意味が個別的な意味となることとする。

『ヴリッティ』に基づけば当該3詩節は次のように解釈される。

- (1) VP 2.44 「他の者たちは次のように主張する。[ 文を構成する語(x)は、単独では、] すべての個別化を[ 受け入れ得る能力を本質とする ] 適合性一般という一般者を理解させる。そのような一般者は、その語(x)の意味が[ 文中の ] 他の語(y)の意味と結合(サンサルガ)することによって、特殊の相を有するあり方を享受する。」
- (2) VP 2.45 「語xの意味の語yの意味との関係(サムバンダ)は、特殊を期待するその一般者の浮動性[ すなわち、すべての特殊に対する受け入れ能力 ] を、[ 語xの意味が関係し得る語yの意味とは別の意味から排除し、] 特殊である語yの意味に参入せしめる[ すなわち、その特殊である語yの意味に制限する ]」
- (3) VP 2.46 「その関係は、[ 関係それ自体として ] その結果から推理されるべきである。その関係は[ 『これ』や『あれ』として確定される ] 相をもたない。この理由から、[ ある者たち、すなわち文法家は ] そのような関係を絶対的な非実体であると宣明する」

バルトリハリが『ヴァーキャパディーヤ』第3巻「関係詳解」章において論ずるバルトリハリの関係概念を考慮するならば、『ヴリッティ』が解釈するVP 2.46の論点は、バルトリハリの関係概念に完全に一致するものである。そのことは『ヴリッティ』が当該の〈関係〉を「関係」というような〈実体〉表示名詞によっては理解されないもの、「これ」

や「それ」といった指示代名詞によっては指示し得ないものと規定していることから明らかである。これに対して、『ティーカー』は、ミーマーンサー学派見解 A の枠組みで、同見解に沿うように VP 2.46 を解釈しようとした。パーニニ文法学派の文意論の観点からは、VP 2.44-46 は『ヴリッティ』に基づくような解釈がなされなければならない。確かなことは、プニアラージャがそれらの詩節を解釈するとき『ヴリッティ』が手元になかったことである。特に、VP 2.46 に対する『ティーカー』を読むとき、彼はパーニニ文法家ではない、という印象を抱かざるを得ない。パーニニ文法家が関係論の枠組みで「非実体」を意味する「ア・サットヴァ」を存在論的に解釈することは先ずあり得ない。

本研究によって、(1)『ヴリッティ』の解釈がパーニニ文法家としてのバルトリハリの言語哲学大系に深く根ざしたものであること、(2)『ティーカー』の解釈の枠組みがプニアラージャの時代(11世紀カシミール)において確立されていた学説誌的(doxographical)諸言語理論理解の固定的枠組みのものであること、(3)『ティーカー』はミーマーンサー学派の文意論の枠組みでバルトリハリの文理論を解釈するが、これはパーニニ文法学本来のものではないこと、(4)したがって『ティーカー』は必ずしもバルトリハリの言語理論に忠実な解釈を提示せず、虚像を提示していること、(5)『ヴリッティ』を読んでいなかったことが確実なヘーラーラージャに対してプニアラージャが『ヴリッティ』を読んでいないということは確実であること、したがって(6)『ティーカー』は、アクルジュカル教授の見解に相違して、ヘーラーラージャの第2巻に対する注釈のプニアラージャによって作成された縮約版ではあり得ないことが明らかとなった。

5世紀の思想家を11世紀の解釈学者の視点でのみ理解することには慎重でなければならない。バルトリハリ言語哲学の原像の理解は、彼の作品に立脚するべきという当然のことが実現される文献環境が一刻も早く整備されるべきである。

さらに、本研究を支える基礎研究として期間中継続した研究協力者との『マハー・パーシャ』研究会の成果として、世界で初めて、A 3.1.7 と A 5.2.94 に対する『マハー・パーシャ』の全容(前者尾園絢一氏、後者川村悠人氏)が明らかにされたことは特筆に値する。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

小川 英世, Vakyapadiya 「<能成者> 詳解」(Sadhanasamuddesa) の研究 VP 3.7.81-86、比較論理学研究、査読無、13号、2016、27 - 65

Hideyo Ogawa, yatharthah and yathatattvam: Bhartrhari on defects in language, 哲学(広島哲学会)、査読有、67集、2015、15-28

小川 英世, Vakyapadiya 「<能成者> 詳解」(Sadhanasamuddesa) の研究 VP 3.7.80、比較論理学研究、査読無、12号、2015、39 - 68

小川 英世, パーニニ文法学<言葉の領域外不使用の原則>について ディゲナーガ「アポー八論」の文法学派的解釈、インド論理学研究、査読無、7巻、2014、53 - 78

小川 英世, Vakyapadiya 「<能成者> 詳解」(Sadhanasamuddesa) の研究 VP 3.7.70 - 79: A 1.4.51 akathitam ca (2)、比較論理学研究、査読無、11号、2014、19 - 61

小川 英世, 意味と存在 バルトリハリのメタ存在論、比較論理学研究、査読無、11号、2014、63 - 74

Hideyo Ogawa, Bhartrhari on three types of linguistic unit-meaning relations, in *Vyakarana across the Ages*, ed. George Cardona, 査読有、2013、217-279

Hideyo Ogawa, Patanjali's view of a sentence meaning and its acceptance by Bhartrhari, in *Devadattiyam*, ed. Francois Voegeli et al., 査読有、2012、159-188

〔学会発表〕(計11件)

小川 英世, 仏教言語理論「アポー八論」と言語使用原則、広島哲学会第66回学術研究発表大会、2015年11月7日、広島大学(広島県・東広島市)

Hideyo Ogawa, Bhartrhari on A 3.2.60 tyadadisu drso 'nalocane kan ca, 16<sup>th</sup> World Sanskrit Conference, 2015年6月29日、バンコク(タイ)

小川 英世, インド文法学派「ある」の意味論的考察、シンポジウム: インドの大地がはぐくんだ世界認識の枠組み 東西哲学対話の再出発、2014年11月23日、東京大学(東京都・文京区)

小川 英世, 「壺がある」 インド文法学派の存在言明分析、広島哲学会第65回学術研究発表大会、2014年11月1日、広島大学(広島県・東広島市)

Hideyo Ogawa, Dignaga on the view of a generic term as denoting a relation, 5<sup>th</sup> International Dharmakirti Conference, 2014年8月26日、ハイデルベルク(ドイツ)

小川 英世, アポー八論への新視座 パーニニ文法学の言語使用原則、アポー八論ワークショップ、2014年8月2日、龍谷大学(京都府・京都市)

Hideyo Ogawa, Two truths theory: What

is vyavahara?: Language as a pointer or the truth, Language in the Traditions of Madhyamaka Thought, Huafan University, 2014年6月27日, 台北(台湾)

小川 英世、意味と存在 バルトリハリ  
のメタ存在論、日本印度学仏教学会第64  
回学術大会パネル発表 パネル発表 A  
インド哲学における<存在>をめぐる議  
論の諸相、2013年9月1日、島根県民会  
館(島根県・松江市)

小川 英世、インド文法学派の意味論を  
考察するための諸命題、CAPE ワークシ  
ョップ: 哲学とインド学のコラボレーシ  
ョン: Aspects of Philosophy of  
Language、2013年8月3日、京都大学  
(京都府・京都市)

Hideyo Ogawa, Existence and  
meaning: Indian grammarians'  
approach to 'existence', International  
Workshop: The Ontology of Asian  
Philosophy: Perspectives from  
Buddhist Studies and Analytic  
Philosophy, 2013年4月13日、龍谷大  
学(京都府・京都市)

Hideyo Ogawa, On a bias for  
doxographical accounts in later  
commentaries on the Vakyapadiya of  
Bhartrhari, 日壇共同国際シンポジウム  
伝統知の継承と発展 インド哲学史にお  
ける“テキスト断片”の意味をさぐる,  
2012年8月22日、信州大学松本キャン  
パス(長野県・松本市)

〔図書〕(計 件)

該当なし

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

該当なし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

該当なし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

該当なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小川 英世(OGAWA, Hideyo)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 00169195

### (2) 研究分担者

該当なし

### (3) 連携研究者

該当なし

### (4) 研究協力者

イ・ジェヒョン(YI, Jaehyung)

石村 克(ISHIMURA, Suguru)

川村 悠人(KAWAMURA, Yuto)

友成 有紀(TOMONARI, Yuki)

尾園 絢一(OZONO, Jun-ichi)